

『土佐日記』『馬のはなむけ』

1、はじめに

・作者：**紀貫之**まきのつらゆき

・成立：**平安時代**（935年ごろ）〔平安時代は794～1185年ごろ〕

・ジャンル：**日記文学**

・別タイトル：「門出」など

・『土佐日記』の特徴：仮名文で書かれた最古の日記文学。女性に仮託して記している。（貫

之自身を第三者の視点で書く。）

土佐守の任期が終わり、京への帰路、934年12月21日～935年2月16日

までの55日間を記録する。

1

・要約

男性の書くという日記を女の私もしてみようと思っ。

12月21日の夜八時ごろ仮の宿へ出発する。

紀貫之は、国司の仕事の引継ぎを終え、夜は多くの人と大騒ぎをした。

22日に和泉の国までの安全を祈願し、船旅ではあるが「馬のはなむけ」をしてもいい。

多くの人には不思議なことに潮海のほとりでふざけあっている。

2. 1、本文

男もすなる日記にきというものを、女もしてみむとて、するなり。

その年の十二月しはす はつかの二十日ひとひあまり一日ひとひの日の、戌いぬの時に、門出かどです。そのよし、いささかにものに書きしへ。

ある人、県あがたの四年五年果とせいつとせてて、例のごとくもみなし終えて、解由げゆなど取りて、住む館たちより出でて、船に乗るへき所へ渡る。かれこれ、知る知らぬ、送りす。年々よく比べつる人々なむ、別れ難く思ひて、日ひじきりひとかへしてついのこころうち、夜更けぬ。

二十二日はつかあまりふつかに、和泉いずみの国くにまでと、平らかに願くわん立つ。藤原ときぎね、船路ふなじなれど馬むまのはなむけす。上中下かみなかしも、酔よひ飽あきて、らとあざしてへ、潮海うしほのほとりにてあはれ命入り。

2. 2、本文(注付)

男もすなる^{☆1}日記^{※1}というものを、女^{※2}もこころみむとて、するなり^{☆2}。

その年^{※3}の十二月^{※4}の二十日あまり一日の日の、戌の時^{※5}に、門出す。そのよし^{☆3}、いささかにもに書きしへ。

ある人^{※6}、県の四年五年^{※7}果てて、例のことども^{※8}みなし終えて、解由^{※9}など取りて、

住む館^{たち}^{※10}より出でて、船に乗るべき所へ渡る。かれこれ、知る知らぬ、^{※11}送りす。年

ろよく比べつる人々^{※12}なむ^{☆4}、別れ難く思ひて^{☆5}、日しきりに^{☆6}とかく^{☆7}つつの

しる^{☆8}うちだ、夜更けぬ。

二十二日^{はしかあまりひつか}に、和泉の国^{いすみ}^{※13}までと、平らかに願立つ^{くわん}^{☆9}。藤原とまぎね^{※14}、船路なれど

馬^{むま}のはなむけす^{※15}。上中下^{かみなかしも}、酔ひ飽きて、潮海のほとりにてあざれ^{※16}命

3、【補足・注】

- ※1「日記」…本来日記は
大阪府南部
- ※7「県の四年五年」…国司
の任期は4・5年
- ※14「藤原ときざね」…伝
「男性」が公的なことや備
忘として「漢文体」で書かれ
※8「例のことども」…慣例
未詳
- ていた。それを「女性」の体
通りの、国司交代の引継ぎ
※15「馬のはなむけ」…送
別の宴。馬の鼻を旅路に向
で「仮名文」で書いたのが
業務
- 『土佐日記』である。
※9「解由」…解由状。新任
け、安全を祈る。
- ※2「女」…紀貫之が女性の
者が発行する、前任者の業
◎紀貫之はこれから船旅な
視点に立って書いた。
務が過失なく行われたこと
のに、陸路を行く「馬」とい
※3「その年」…任期を終
を証明する公文書。
う言葉を使うおもしろさ。
- えた934年
※10「住む館」…国司の官
※16「あざれ」…終止形
「あぞる」で「腐る」「ぶぞ
※4「しはす」…「師走」と
舎。
ける」の意味。
- の表記もある
※11「知る知らぬ」…「知
◎「塩（＝塩）」は防腐効果
があるのに、その人たち
- ※5「戌の時」…午後八時ご
っている人も、知らない人
◎「あざれ合」っている（ぶ
ろ
も」
※12「比べつる人々」…仲
だけあっている＝腐ってい
- ※6「ある人」…紀貫之自
※1「比べつる人々」…仲
身。「女性」の立場から見
良くしてきた人たち
- と「ある人」にあたる。
※13「和泉の国」…現在の
る、）というおもしろさ。

【重要単語・文法】

- ☆1「なる」…伝聞の助動詞「なり」連体形
- ☆2「なり」…断定の助動詞「なり」終止形

◎この二つの「なり」の識別は頻出。

「すなる日記」の「す」が終止形↓
サ変の終止形につく「なり」は
伝聞・推定
「するなり」の「する」が連体形↓
サ変の連体形につく「なり」は
断定

となり、連体形「思う」になるが、接続助詞「て」が「思う」につづるのど、「思ひて」となり、結びが流れている。

☆6「日じきり」…一日中

☆7「とかく」…あれこれ

☆8「のしる」…大騒ぎする。通常、「な

む」の結びの語となり、結びの語としての連体形「のしる」になるが、「うち」を修飾するので連体修飾語としての連体形になり、結びが流れている。

☆3「よじ」…このどは「よきよし」ほか「理

由・由緒・風情・方法」など

☆4「なむ」…係助詞「なむ」。通常は係り

結びで結びの語) ☆5「思ひて」か ☆8「の

のしる」に係り、結びの語を連体形にする。

☆5「思ひて」…通常「なむ」の結びの語

◎このような結びが流れることを「結びの流れ・結びの消滅・結びの消去」という。

☆9「立つ」…下二段活用動詞。自動詞「立

つ」は四段活用・他動詞「立つ」は下二段活

用。ここは「願」を立つ「なので他動詞。

4、現代語訳

男もするといつ日記といつものを、女である私もしてみようと思つて、するのである。

ある年(934年)の12月21日の、午後八時ごろに、出発する。そのいきさつを(=間のことを)、すこし物(日記の紙)に書きつける。

ある人(他人である女性に仮託した紀貫之から見た紀貫之自身)が、国司の4・5年の任期を終えて、所定の引継ぎ業務などをすべてし終えて、(後任者より)解由状などをもらつて、官舎から出て、船に乗ることになっている所へ移動する。あの人この人、知っている人知らない人が(紀貫之)を見送る。長年仲良くしてきた人々は、別れ難く思つて、一日中あれこれして大騒ぎしているうちに夜が更けてしまった。

22日、和泉の国まで(安全に)いけますように(と)、平穩を願う。藤原ちとまざねは、(紀貫之の旅路は馬に乗らない)船路であるけれど「馬のはなむけ」をする。身分の上の人も真ん中の人も下の人もみんな酔っぱらつて、とても不思議なことに、(防腐効果のある)潮海(=塩海)のほとりまでぶざけあつてゐる(=腐つてゐる)。

5. 1、本文と現代語

男もするという日記というものを、女である私もしてみようと思って、するのである。

男もする日記というものを、女もしてみたい。するな。

ある年（934年）の12月21日の、午後八時ごろに、飯の宿へ出発する。そのいきさつを（||間のことを）、すこし

その年の十二月の二十日あたり二日の、戌の時に、門出す。そのよじ、うちかたに物（日記の紙）に書きつける。

ものに書きしへ。

ある人（他人である女性に仮託した紀貫之から見た紀貫之自身）が、国司の4・5年の任期を終えて、所定の引継ぎ業務などをすべてし終えて、（後任者より）解由状などをもらって、官舎か

ある人、県の四年五年果てて、例のこともみなし終えて、解由など取りて、住む館より出て、船に乗ることになっている所へ移動する。あの人この人、知っている人知らない人が（紀貫之）を見送る。仲良くしてきた人々は、

り出でて、船に乗るべき所へ渡る。かれこれ、知る知らぬ、送りす。年ごろよく比べる人々別れ難く思つて、一日中あれこれして大騒ぎしているうちに夜が更けてしまった。

なむ、別れ難く思ひて、日記のつとがへてのつとをさへ、夜更けぬ。

22日、和泉の国まで（安全にいきますように）と、平穩を願う。藤原ちときさねは、（紀貫之の旅路は馬に乗らない）船路であるけれど「馬のはなむ

二十二日、和泉の国までと、平らかに願立つ。藤原ちときさね、船路なれど馬のはなむけ」をする。身の上の人も真ん中の人も下の人もみんな酔っぱらって、とても不思議なことに、（防腐効果のある）潮海（||塩海）のほとりてふざけあっている（||腐っている）。

けす。上中下、酔ひ飽きて、さうせずこへ、潮海のほとりてあはれ命入り。

5. 2、本文と現代語訳

男もするという日記というものを、女である私もしてみようと思って、するのである。

男もする ☆1 日記 ※1 と 女もする ☆2 日記 ※2

ある年（934年）の12月21日の、午後八時ごろに、仮の宿へ出発する。そのいきさつを（＝間のこと）を、

その年 ※3 の十二月 ※4 の二十日 ※5 まり一日 ※6 の、戌の時 ※7 に、門出す。そのよじ ※8、すこし物（日記の紙）に書きつける。

うしろかにもに書きまじく。

ある人（他人である女性に仮託した紀貫之から見た紀貫之自身）が、国司の4・5年の任期を終えて、所定の引継ぎ業務などをすべてし終えて、（後任者より）解由状などをもらって、

ある人 ※9、県の四年五年 ※10 果てて、例のことども ※11 みなし終えて、解由 ※12 など取りつて、

官舎から出て、船に乗ることになっている所へ移動する。あの人この人、知っている人知らない人が（紀貫之）を見送る。長年

住む館 ※13 より出でて、船に乗るべき所へ渡る。かれこれ、知る知らぬ、※14 送りす。年

仲良くしてきた人々は、別れ難く思っ、一日中あれこれして大騒ぎしている

るよく比べつる人々 ※15 なむ ☆16、別れ難く思ひて ☆17、日しきりて ☆18 とかく ☆19 つついのうちに夜が更けてしまった。

しる ☆20 うちに、夜更けぬ。

22日、和泉の国まで（安全にいきますように）と、平穩を願う。藤原ときぎざねは、（紀貫之の旅路は馬に乗らない）船路であるけれど「馬

はつかあまのふつか 二十二日、和泉の国 ※21 まで、平らかに願立し ☆22。藤原ときぎざね ※23、船路なれど馬

のはなむけ」をする。身分の上の人も真ん中の人も下の人もみんな酔っぱらって、とても不思議なことに、（防腐効果のある）潮海（＝塩海）のほとりてふぶざけあっている（＝腐っている）。

のほなむけす ※24、上中、酔ひ飽きつゝ、潮海のほとりてふぶざねれわたる ※25 命入

り。

6、品詞分解

| 単語 | 品詞等 |
|----|------------|
| 男 | 名詞 |
| も | 係助詞 |
| す | 動詞・サ変・終止形 |
| なる | 助動詞・伝聞・連体形 |
| 日記 | 名詞 |
| と | 格助詞 |
| いふ | 動詞・四段・連体形 |
| もの | 名詞 |
| を、 | 格助詞 |
| 女 | 名詞 |
| も | 係助詞 |
| し | 動詞・サ変・連用形 |
| て | 接続助詞 |
| み | 動詞・上一段・未然形 |
| む | 助動詞・意志・終止形 |
| と | 格助詞 |
| て、 | 接続助詞 |
| する | 動詞・サ変・連体形 |
| | |
| | |

| | |
|----------|-------------|
| なり。 | 助動詞・断定・終止形 |
| それ | 代名詞 |
| の | 格助詞 |
| 年 | 名詞 |
| の、 | 格助詞 |
| 十二月 | 名詞 |
| の | 格助詞 |
| 二十日あまり一日 | 名詞 |
| の | 格助詞 |
| 日 | 名詞 |
| の | 格助詞 |
| 戌 | 名詞 |
| の | 格助詞 |
| 時 | 名詞 |
| に、 | 格助詞 |
| 門出す。 | 動詞・サ変・終止形 |
| そ | 代名詞 |
| の | 格助詞 |
| よし、 | 名詞 |
| いささかに | 形容動詞・ナリ・連用形 |

| | |
|-------|------------|
| もの | 名詞 |
| に | 格助詞 |
| 書きつく。 | 動詞・下二段・終止形 |
| ある | 連体詞 |
| 人、 | 名詞 |
| 県 | 名詞 |
| の | 格助詞 |
| 四年 | 名詞 |
| 五年 | 名詞 |
| 果て | 動詞・下二段・連用形 |
| て、 | 接続助詞 |
| 例 | 名詞 |
| の | 格助詞 |
| 事ども | 名詞 |
| みな | 副詞 |
| し終え | 動詞・下二段・連用形 |
| て、 | 接続助詞 |
| 解由 | 名詞 |
| など | 副助詞 |
| 取り | 動詞・四段・連用形 |

| | |
|-----|------------|
| て、 | 接続助詞 |
| 住む | 動詞・四段・連体形 |
| 館 | 名詞 |
| より | 格助詞 |
| 出で | 動詞・下二段・連用形 |
| て、 | 接続助詞 |
| 船 | 名詞 |
| に | 格助詞 |
| 乗る | 動詞・四段・終止形 |
| べき | 助動詞・当然・連体形 |
| 所 | 名詞 |
| へ | 格助詞 |
| 渡る。 | 動詞・四段・終止形 |
| かれ | 代名詞 |
| これ、 | 代名詞 |
| 知る | 動詞・四段・連体形 |
| 知ら | 動詞・四段・未然形 |
| ぬ、 | 助動詞・打消・連体形 |
| 送り | 名詞 |
| す。 | 動詞・サ変・終止形 |

| | |
|------|--------------|
| 年ごろ | 名詞 |
| よく | 形容詞・ク活用・連用形 |
| 比べ | 動詞・下二段・連用形 |
| つる | 助動詞・完了・連体形 |
| 人々 | 名詞 |
| なむ、 | 係助詞（係） |
| 別れ難く | 形容詞・ク活用・連用形 |
| 思ひ | 動詞・四段・連用形（流） |
| て、 | 接続助詞 |
| 日 | 名詞 |
| しきりに | 副詞 |
| とかく | 副詞 |
| し | 動詞・サ変・連用形 |
| つつ、 | 接続助詞 |
| ののしる | 動詞・四段・連体形（流） |
| うち | 名詞 |
| に | 格助詞 |
| 夜 | 名詞 |
| 更け | 動詞・下二段・連用形 |
| ぬ。 | 助動詞・完了・終止形 |

| | |
|---------|-------------|
| 二十二日 | 名詞 |
| に、 | 格助詞 |
| 和泉 | 名詞 |
| の | 格助詞 |
| 国 | 名詞 |
| まで | 副助詞 |
| と、 | 格助詞 |
| 平らかに | 形容動詞・ナリ・連用形 |
| 願 | 名詞 |
| 立つ。 | 動詞・下二段・終止形 |
| 藤原ときざね、 | 名詞 |
| 船路 | 名詞 |
| なれ | 助動詞・断定・已然形 |
| ど | 接続助詞 |
| 馬のはなむけ | 名詞 |
| す。 | 動詞・サ変・終止形 |
| 上 | 名詞 |
| 中 | 名詞 |
| 下、 | 名詞 |
| 酔ひ飽き | 動詞・四段・連用形 |

| | |
|-------|--------------|
| て、 | 接続助詞 |
| いと | 副詞 |
| あやしく、 | 形容詞・シク活用・連用形 |
| 潮海 | 名詞 |
| の | 格助詞 |
| ほとり | 名詞 |
| にて | 格助詞 |
| あざれ合へ | 動詞・四段・已然形 |
| り。 | 助動詞・存続・終止形 |

◎ 船路なれど馬のはなむけす。

紀貫之が四国から京に帰るには、これから船に乗らなければなりません。この旅路を「船路」といいます。船に乗って陸路を行く馬なんて必用ありませんね。けれども「別の宴・饗別」を表す『馬』のはなむけ」という言葉を入れて用いるので、「船路なれど馬」という面白さがあります。「なれど」という逆説の表現が使用されているのがポイントです。

◎ 潮海のほとりにてあぢわれ合入り。

当時は保冷の技術が発達してないので、生ものなどはすぐに腐り、保存ができませんでした。この「腐る」ことを古語では「あぢる(饜る)」といいます。そして腐るのを防ぐために使用されたのが防腐効果のある「塩」なのです。だから塩分が含まれる「潮海」＝塩海「にも防腐効果があります」。

一方、宴会の場ではたくさんのお酒に酔いしれています。このことを古語で「あぢる(饜る・狂る)」といいます。「饜る」と同じですね。

このことかかあぢる(饜る・狂る)はものなら潮海の近くで、人々があぢる(饜る)という面白さがあります。

8、参考

- ・教科書 『新編古典B』(2015) 東京書籍
- ・教科書 『精選国語総合』(2013) 三省堂
- ・『教科書ガイド精選国語総合古典編東京書籍版』(2013) あすところ出版
- ・『数研出版教科書ガイド高等学校国語総合国語総合現代文編・古典編』(2013) 学習

ックス